

児童期における歌唱活動の機能と役割の検討

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	カスガ アヤ 春日 文
所属等	白百合女子大学 人間総合学部 助教
プロフィール	これまで乳幼児期における歌唱活動の機能と役割について研究を行ってきました。今後は生涯発達の視点から、児童期以降の歌唱活動の機能と役割がどのように変容していくのかを明らかにし、最終的には、地域社会において心理社会的な支援につなげていくことを目標として研究を続けていきたいと考えています。最近では、地域公開講座および子育て支援講座において親子とともに歌唱活動を行い、歌の効果伝える活動を積極的に行っています。

1. 研究の概要

乳幼児期における歌唱活動は情動的コミュニケーションという側面があり、子どもの自己表現活動や情動調整の発達を促し、社会情動的活動の基盤作りに貢献することが示唆されている。しかしながら、歌唱活動に関する研究は少なく、その機能と役割が生涯にわたりどのように変化していくのかは明らかにされていない。児童期において、歌唱活動はコンパニオンシップの場、つまり友だちと喜びや情動を共有する場となり、生涯を通して子どもの発達に影響を及ぼし、特に社会情動的発達に大きな影響を与えると予想される。そこで、本研究では児童期に着目して、歌唱活動の機能と役割について検討することを目的とする。

具体的には、乳幼児期と児童期の歌唱活動の状況が歌唱活動時における子どもの反応にどのように影響し、母親とのアタッチメント及び友だちとのコンパニオンシップにどのように繋がっていくのかを小学校低学年(1~2年)100名・中学年(3~4年)100名・高学年(5~6年)100名の各学年段階で検討する。まず、小学校1~6年生までの子どもを対象に、その母親及び友だちとの歌唱場面でみられる相互行為を検討する。次に、母子の歌唱活動及び子どもの反応、母親とのアタッチメント及び友だちとのコンパニオンシップとの関連を検討するために、小学校1~6年生までの子どもを育てる母親と子ども(300名)にウェブでの質問紙調査を実施する。内容は、母親及び友だちとの歌唱場面でみられた相互行為を基に抽出した項目と、「歌い聞かせ態度と歌い聞かせによる子どもの反応についての質問紙」(中島, 2010)を参考にした項目とコンパニオンシップに関する項目(Furmanら, 1985)および「児童用アタッチメント機能尺度」(村上・櫻井, 2014)の項目を用いて作成する。

2. 研究の動機、目的

乳幼児期では、大人から歌いかけをされた体験から子ども自らが自分に対して歌いかけをするようになるという自立化の過程がみられる。この自立化の過程を Vygotsky の越境活動の考え方から説明すると、子どもは大人の役割の境界を越えてその役割を担うようになるという意味で、垂直的な越境活動と表現される。また、児童期では複数文脈を横断して一つの活動を異なる視点から見直し、自分の活動を再吟味・深化させる水平的な越境活動が盛んになるという。この越境活動の視点から歌唱活動を捉えると、歌いかけによる母子の垂直的な越境活動を通して、まず母親とのアタッチメントの形成に影響を及ぼし、しだいに、友だちと歌を共有しながら活動の場は家庭以外にも広がり、水平的越境活動が盛んになり、友だちとのコンパニオンシ

ップの形成につながっていくといえよう。音楽はポジティブな情動を喚起するといわれ、歌唱活動はコンパニオンシップが生み出される重要な場であると考えられる。また、児童期は重要な対人関係が家族から友だちも含めた関係へと変容する時期であり、コンパニオンシップが生み出す情動が子どもの関心を社会へ向ける動機づけとしても機能すると考えられる。したがって、アタッチメントやコンパニオンシップの形成が歌唱活動においてどのようにみられるのか捉えることは、子どもの社会情動発達への影響を知るための重要な足がかりとなるといえる。そこで、本研究では児童期に焦点をあて、乳幼児期と児童期の歌唱活動の状況が歌唱活動時における子どもの反応にどのように影響し、母親とのアタッチメント及び友だちとのコンパニオンシップにどのように繋がっていくのか検討することを目的とする。

3. 研究の結果

(1) 調査項目の因子分析

乳幼児期の歌唱活動の状況は2因子が抽出され、「自由な歌唱活動」、「対話型歌唱活動」と命名した。児童期の歌唱活動の状況は2因子が抽出され、「自由な歌唱活動」、「対話型歌唱活動」と命名した。歌唱活動による子どもの反応は2因子が抽出され、「情動の安定」、「水平的越境活動の進行」と命名した。児童期アタッチメント機能は4因子が抽出され、「分離苦痛」、「安全基地」、「近接性の維持」、「安全は避難場所」と命名した。コンパニオンシップ尺度は1因子となり、「友だちとのコンパニオンシップ」と命名した。

(2) 各下位尺度の平均値の比較

低学年、中学年、高学年の各学年について下位尺度の平均得点に有意差がみられるか1要因分散分析で検討した(Table1)。児童期の歌唱活動の「対話型歌唱活動」の主効果が有意であり多重比較をしたところ、低学年になるほど値が高まることが示された。次に、歌いかげによる反応の主効果が有意であり多重比較をしたところ、低学年の方が中学年より有意に値が高いことが示された。また、母親とのアタッチメントの主効果が有意であり多重比較をしたところ、低学年の方が中・高学年よりも有意に値が高いことが示された。

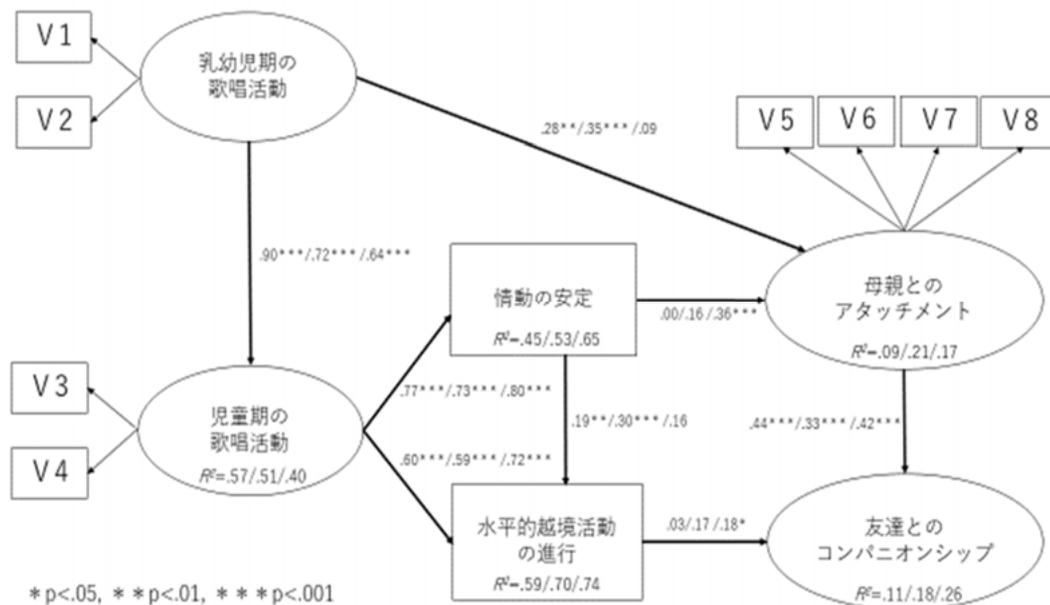
Table6 1要因の分散分析の結果

	(小学)		低学年		中学年		高学年		F	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
乳幼児期の歌唱活動										
自由な歌唱活動	3.06	.50	2.96	.58	3.02	.56	0.81			
対話型歌唱活動	2.69	.52	2.63	.59	2.69	.57	0.34			
児童期の歌唱活動										
自由な歌唱活動	3.07	.59	2.86	.69	2.92	.68	2.82			
対話型歌唱活動	2.49	.66	2.22	.66	2.19	.64	6.35 **	低学年 > 中学年 > 高学年		
歌唱活動による反応										
情動の安定	2.68	.63	2.46	.65	2.47	.64	3.60 *	低学年 > 中学年		
水平的越境活動	3.08	.55	2.86	.70	2.88	.67	3.67 *	低学年 > 中学年		
母親とのアタッチメント										
分離苦痛	3.65	.48	3.44	.64	3.29	.72	8.28 ***	低学年 > 中学年, 高学年		
安全基地	3.38	.48	3.09	.71	3.07	.68	7.80 ***	低学年 > 中学年, 高学年		
近接性の維持	3.63	.46	3.42	.63	3.27	.66	9.19 ***	低学年 > 中学年, 高学年		
安全な避難場所	3.46	.52	3.25	.61	3.14	.64	7.38 **	低学年 > 中学年, 高学年		
友達とのコンパニオンシップ	3.24	.57	3.27	.58	3.33	.61	0.58			

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

(3) 変数間の影響過程

乳幼児期の歌唱活動と児童期の歌唱活動による子どもの反応、母親とのアタッチメント及び友だちとのコンパニオンシップとの関連について、両者間の因果的な流れを推定してモデルを策定し、その適合性を検討するために共分散構造分析をした。その結果、高い適合性指標を確保した上で、低・中・高学年の比較を伴う因果のパス図が得られた(Figure1)。



注) →の左の数値は低学年/中央は中学年/右は高学年を対象に算出した標準偏回帰係数。潜在変数と観測変数の下部の数値は決定係数。誤差変数は省略。V1:自由な歌唱活動, V2:対話型歌唱活動, V3:自由な歌唱活動, V4:対話型歌唱活動, V5:分離苦痛, V6:安全基地, V7:近接性の維持, V8:安全な避難場所。適合性指標 $\chi^2=11.88$, $df=7$, CFI=.99, RMSEA=.05, AIC=39.88

Figure1 多母集団同時分析の結果

4. これからの展望

今後の課題としては、本報告では、歌唱活動が子どもの社会情動発達の足場作りとなっていることは示唆されたが、具体的にどのような発達に影響を及ぼすかまでは明らかにできなかったため、この点について検討していく必要があると考える。また、今後は児童期に留まらず、青年期以降の歌唱活動の機能と役割について検討し、歌唱活動がどのように生涯にわたって影響を及ぼし、人生においてどのような意味をもつのか検討していきたい。

5. 社会に対するメッセージ

本研究により、児童期においても乳幼児期の歌唱活動の効果が持続し、また、歌唱活動により子どもの情動が安定し、歌を通して体験した安心感は母親との良い関係性につながるとともに、友だちとの関係作りへと展開することが考えられました。歌を通して育まれる人と人との関係性や、そこから生まれる安心や喜びを感じる子どもの心を大切に扱うことで、歌のある人生がより豊かなものになる可能性があると考えます。最近の活動としては、歌唱活動を取り入れた子育て支援活動を行いました(Figure2)。親子で笑い合う様子や新しい友だちができる様子がみられ、温かいひとときとなりました。女性研究者奨励金による温かいご支援により、児童期における歌唱活動の機能と役割の一端が明らかになり、得られた研究成果を地域活動へと繋げることができています。また、青年期の歌唱活動に関する研究への道筋ができ、研究活動を継続する上で大きなステップとなりました。今後も、研究で得られた成果を広く社会に発信できる場を大切にしながら、歌唱活動の研究を継続していきたいと願っています。



Figure2 子育て支援活動の様子